

氏名 (生年月日)	<small>オオ</small> <small>タニ</small> <small>アキラ</small> 大 谷 晃 (1991年4月11日)
学位の種類	博士 (社会学)
学位記番号	文博甲第154号
学位授与の日付	2022年3月16日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	現代における「地域コミュニティ」再編と担い手たちの「ローカルな実践」 都営「立川団地自治会」における参与的行為調査
論文審査委員	主査 新原 道信 副査 首藤 明和・中筋 直哉

### 内容の要旨及び審査の結果

#### 1. 本論文の主旨と当該研究分野の背景

本論文は、グローバル化にともなう流動化と分断がすすむ現代において、「地域コミュニティ (local community)」の再編がいかにしてなされるのかというテーマを、1990年代半ばの建替え後の東京都立川市の都営「立川団地 (仮名)」における団地自治会の再編プロセスを事例に、絶えず種々の関係を生み出し、組み直していこうとする担い手たちの「ローカルな実践」から、考察するものであった。

本調査研究は、2つの同時代的な問題を背景に持っていた。第1に、現代において急速に進むグローバル化、それに伴う人・物の移動と流動化の中で、地域社会が分断され、個人が「原子化」される危機である。とりわけ地域社会学者の浅野慎一が論じたように、東日本大震災以降、新自由主義的な国家政策や資本による「『選択と集中』、つまり棄民・辺境の創出」の論理が顕在化し、公共政策の縮小化、高齢者・障害者・外国人住民・ホームレス・生活保護受給者などの人々への不満や批判が噴出している。第2に、私たちの「場所と関係する帰属への欲求」(G. デランティ)の高まりに反し、帰属の受け皿となりうる地域組織や地域集団が衰退・崩壊していつている点である。町内会・自治会などの地域組織への加入率の低下、東京一極集中や少子高齢化の進展に伴う限界集落の登場は、既に唱えられて久しい。

今日における「地域コミュニティ」を考える時、1つの基点として、ある特定の領域性を伴う地域・地区 (the local) はあるとしても、従来の地域共同体のように人々の包括的な関係を措定することはできない。また、ある特定の「町内会」や、ある時に人々に共有される共同生活上のイシュー、「理念」や「記憶」、あるいは特定の人物の「リーダーシップ」に還元して捉えることもで

きない。

このような背景と、従来の「町内会」研究や「イシュー」に着目した都市コミュニティ研究の先行研究の検討から、本稿では、ある特定の「場所」を「基点」として、「住まうこと」に伴う特定の「イシュー」や「組織」といった〈関係の契機〉、「理念」や「記憶」といった〈関係の持続〉となる諸要素を、絶えず組み直しながら、自らも生成・変成していく担い手たち（〈関係を担う主体〉）の実践としての、「ローカルな実践」に焦点を当てた。「地域コミュニティ」とは、上記の3つの要素によって構成される「関係の総体」を概念化したものである。

## 2. 本論文の構成

本論文の構成は以下のとおりである。序章において、今日における「地域コミュニティ」を、めぐる問題の所在、〈テーマとリサーチ・クエスチョン〉を確認した後、1章では、筆者による分類である「地域コミュニティ」の要素である関係の〈契機〉〈持続〉〈主体〉の観点から先行研究をレビューした。2章3章では、参与的行為調査により蓄積したデータと理解に基づき、調査研究のフィールドである「立川団地」（仮名）の概況と建替え後の自治会再編のプロセスを詳細に検討している。4章では、広報誌のテキスト分析により、自治会「理念」の構築についての考察をすすめた。5章では、とりわけ、〈関係の持続〉の観点から自治会運営の継承と模索をめぐる「新たな契機」と困難を指摘し、以上の考察から結論部の理論的な知見を析出した。さらに、補遺（**アペンディクスA**）においては、調査者のフィールド内での関係性の変化についてのリフレクションを組み込むことで“リフレクシヴな調査研究（Reflexive research）”とする努力をしている。

### 登場人物・地域諸団体名一覧（p4）

### 序 現代における「地域コミュニティ」の再編と担い手たちの「ローカルな実践」（p8）

#### 第1章 「地域コミュニティ」研究の焦点——〈関係の契機〉／〈関係の持続〉／〈関係を担う主体〉（p11）

- 1-1. 先行研究の検討——戦後日本の「町内会」研究と都市コミュニティ研究
- 1-2. 本研究の分析枠組み
- 1-3. 都営「立川団地」を対象とする理論的意義
- 1-4. 調査方法としての参与的行為調査
- 1-5. 小括

#### 第2章 立川・砂川地域と都営「立川団地」の地域概況——都営団地「建替え」という現象の位置づけ（p40）

- 2-1. 立川・砂川地域の概況：歴史・人口動態・空間
- 2-2. 「立川団地」の概況と歴史
- 2-3. 「団地建替え」のもたらした影響

### 第3章 団地建替え後の自治会再編のプロセス——固有の関係と担い手たちの可視化 (p72)

- 3-1. 元からあった関係の組織化——子育てネットワークから子育て支援団体へ
- 3-2. 新たな 이슈をめぐる活動と新住民たちの参入
- 3-3. 小括

### 第4章 自治会広報紙における自治会「理念」の構築——過去／現在／未来の参照 (p104)

- 4-1. 「立川団地だより」の特徴と頻出語
- 4-2. 「理念」への言及
- 4-3. 小括

### 第5章 自治会運営の継承と組み直しの模索——〈関係の持続〉と「新たな契機」の可能性と困難 (p143)

- 5-1. 「役員会」における共同問題発見・解決の構造と関与するアクター
- 5-2. 「年中行事」の構造と動態
- 5-3. 関係の継承と再編をめぐって
- 5-4. 小括

### 第6章 結論 (p201)

- 6-1. 各章の知見——「立川団地」における建替え後の自治会再編のプロセス
- 6-2. 現代における地域コミュニティ「再編」と「ローカルな実践」

### 参考文献 (p212)

アペンディクスA 「立川プロジェクト」と本研究の経緯 (p220)

アペンディクスB 「立川団地」関連・新聞記事一覧 (p233)

## 3. 各章の概要

### 第1章 「地域コミュニティ」研究の焦点——〈関係の契機〉／〈関係の持続〉／〈関係を担う主体〉

第1章では、現代における「地域コミュニティ」再編と担い手たちの「ローカルな実践」を捉えるために、〈関係の契機〉、〈関係の持続〉、〈関係を担う主体〉という3つの要素から先行研究

を検討し、本稿の分析枠組みと調査方法が論じられた。

本稿の背景には、戦後日本の「町内会」研究と都市コミュニティ研究という2つの「地域コミュニティ」研究の系譜がある。高度経済成長期の大量の人々の「移動」と新たな地域での「定住」という同時代状況の下に、「住まうこと」に伴う包括的な「共同関心」に伴う組織（「住縁アソシエーション」）として「町内会」を規定する岩崎信彦の研究や、人々の「イシュー」ごとの「有限責任的」な関わりを論じた奥田道大の研究が生まれていった。一方で、住民組織の衰退や共通の「イシュー」が見出し難い現代において、人々の〈関係の契機〉に「住まうこと」はなりうるのだろうか。また、「理念」や「記憶」の基盤として「地域コミュニティ」を措定したり、「地域コミュニティ」で活動する担い手たちを「自律的」「自由意志的」な主体像や「弱さを伴う」主体像といったように与件化して捉えることができるのだろうか。

本稿は上記の課題を先行研究から引き継ぎつつ、〈関係の契機〉、〈関係の持続〉、〈関係を担う主体〉という3つの要素から、「地域コミュニティ」再編と、担い手たちの「ローカルな実践」を捉えようとするものであった。

#### 本研究の分析枠組み

「地域コミュニティ」を構成する要素	先行研究との理論的接続	分析対象 (「ローカルな実践」)
イシューと組織	〈関係の契機〉	固有の関係やネットワークの生成・再編プロセス
理念と記憶	〈関係の持続〉	過去・現在・未来を参照した「理念」の構築プロセス
担い手	〈関係を担う主体〉	担い手たちの生成・変化のプロセス

第1に、〈関係の契機〉を「住まうこと」の相対化によって捉えなおし、「イシュー」や「組織」による人々の固有の関係やネットワークは、いつ、どのように生成・再編されてきたのかというリサーチ・クエスチョンを立てた。第2に、〈関係の持続〉を「コミュニティ理念」による持続と「差異の縮減」(Z. バウマン)の回避、「持続する現実」としての「空間」と「集合的記憶」への着目(M. アルヴァックス)として捉えるために、〈「地域コミュニティ」の「理念」は、いつ、誰の手によって、いかなる過去・現在・未来を参照して構築されてきたのか〉というリサーチ・クエスチョンを立てた。第3に、〈関係を担う主体〉を、「記憶の共同体 (community of memory)」に基づく「コミットメントの実践 (practice of commitment)」(R. N. ベラー)という類型論を参照しながら何らかの関係に拘束された主体（「負荷のある自己」）として捉えるために、〈特定の場所を基点として、特定の関係の中に埋め込まれながら、新たな関係を生み出し継承していこうとする担い手たちは、いかなる主体であるのか〉というリサーチ・クエスチョンを立てた。本稿は、

これらの諸要素の総体として「地域コミュニティ」再編のプロセスとそこでの担い手たちの「ローカルな実践」を捉えようとするものであった。

本稿では、数十年間の住み合いによって一定の歴史性を持つ「定住」の場となりつつありながら、1990年代半ばの建替えによって新たな人の「移動」を経験した都営団地に焦点を当てる。1990年代以降、都営団地は建替えによって間取りが改善される一方で、福祉政策として単身高齢者や障害者の住民も増加していった。ここでは、高度経済成長期に所与であった新中間階級の階層的な同質性によるコミュニティやアソシエーションの形成も、困難になっている。人々はいかにして新たな関係を生み出しつつ、従来の関係を持続させるのか。本稿では、「立川団地」という特定の場所を基点として、繰り返し関係を組み直していく担い手たちの「ローカルな実践」から捉えていこうとした。

また、担い手たちの「ローカルな実践」に焦点を当てる本研究の調査方法としては、「調査者と当事者」いずれもの「セルフ」の生成や変化を捉えるための方法が必要であった。そこで、W.F. ホワイトが自らの参与観察調査から錬成した「参与的行為調査 (participatory action research)」と呼ばれる調査戦略を用いた。これは、「調査者が研究対象の組織のメンバーを招き、データの収集と分析を通しての調査計画や、調査での発見を実際に適用していくという研究のプロセスのすべての段階において、共に参加し研究する方法」(W.H. ホワイト)である。

## 第2章 立川・砂川地域と都営「立川団地」の地域概況——都営団地「建替え」という現象の位置づけ

第2章では、都営「立川団地」および立川市・砂川地域の歴史と概況を述べつつ、1990年代半ばの団地建替えが住民たちに与えた影響を論じた。中世以来の多摩川流域の集落や近世の新田開発に由来を持つ「立川地域」「砂川地域」では、国家的な鉄道開発と軍事基地の造成によって急速な都市化が生じていった。また、高度経済成長期以降に不足した住宅の供給地点となり、未開拓の土地に建てられたのが「立川団地」を含む公営・公団団地であった。団地が建てられた土地は、近世以前の柴崎村・砂川村のいずれから見ても周縁的であり、荒野として残されていたがゆえに人々の畏怖や信仰の対象になるような場所であった。ゆえに、初期の入居者はインフラの未整備などの困難を抱えていた。「立川団地」もまた、「陸の孤島」と呼ばれるなど入居当初の生活には困難が伴っていたが、連合自治会を結成し、各地域から移り住んだ人々がそれぞれの地元での共同性を持ち込んでいた。近隣の公団団地は、1970年代の革新市政の基盤となるなど政治的な力も次第につけていくようになった。

1990年代半ばの「立川団地」をはじめとする都営団地の建替えは、東京一極集中の是正を目的とした首都圏の再整備計画の中で「再生」の対象となる中で行われたものであった。「立川団地」では、建替えによって住環境の改善がみられたものの、転出者の増加による自治会の解散や行事の途絶などの問題が生じた。1997年、団地全体の住民自治組織であった従来の「立川団地連合自治会」に代わって、「立川団地自治会」が新たに発足した。同時期、子育て環境や高齢者の見守り、違法

駐車のパトロール、親睦を深めるための「年中行事」の復活など、住環境を整備するためのうごき  
が、新住民を含めて、自治会や新たにつくられた関連組織の間で立ち上がっていく。以降、「立川  
団地自治会」は、上述の建替えと同時期から生じてきた高齢者・子どもをめぐる問題を中心に、活  
動を行っていく。その結果、近年では「コミュニティの成功例」として、注目されていったのであ  
った。

### 第3章 団地建替え後の自治会再編のプロセス——固有の関係と担い手たちの可視化

第3章では、1990年代半ばの建替え直後の時期に、建替え以前からの旧住民たちと、建替え後入  
居の新住民たちが、何を契機としていかに個別の関係を組み直していったのか、それがどのように  
自治会組織の再編と接続したのかを述べてきた。ここでは、以下3つの例を論じた。

- (1) 旧住民同士の関係の再編として、子どもたちの非行・虐待といった新たな「イシュー」を問  
題視した母親たちが設立した、ボランティア・アソシエーションである「子育て支援団体M」。
- (2) 建替え以後に入居した新住民たちを中心に、駐車場不足・違法駐車の問題や途絶した自治会主  
催行事の再生を目的とした、専門的・限定的な自治会下部組織である「駐車場管理部」や「体育部」。
- (3) 建替え以前からの住民との近隣関係を契機として、建替え後入居の新住民たちが自治会役員と  
して参与していったプロセス。

本章では、何が建替え後の人々の〈関係の契機〉になったのかに着目し、理論的知見を4点述べ  
た。

(1) 第1に、近隣に「住まうこと」に伴う関係である。建替え以前の「立川団地」では、Stさん  
とSkさんの近隣付き合いや、入居当初のSkさんが「体育部は若い人がやるのよ」と声を掛けられ  
たように、近隣に「住まうこと」を契機とした関係がつけられていた。また、建替え以前からの住  
民たち（「きくえさん」やDzさん）と同じ号棟に住むという近隣関係を持ち、声を掛けられたり支  
援を受けたことが、建替え後の新住民たち（KbさんやHsさん）にとっては自治会役員になる契機  
となっていた。以上の点からは、「立川団地」においても、近隣に「住まうこと」は重要な〈関係  
の契機〉になっていることがわかる。

(2) 第2に、同時代に「子育て」をしたことである。「子育て支援団体M」のメンバーの〈関係  
の契機〉は、建替え以前の「立川団地」で同級生の子どもたちを共に育てた2つの母親たちのつな  
がりに起源があった。また、建替え後に入居してきた新住民たちであるSeさんやSmさんも、「PTA  
の親父組」として出会い、その後の「運動会」の活動に参加していった。以上のことからわかる  
ように、子育てを共にすることは、多くの場合「住まうこと」に伴う近隣関係に基づいている。Sk  
さんやStさんが語る建替え前の「立川団地」での子育て・生活風景のように、近隣を基礎とした相  
互扶助的な関係は、「住縁」や「地縁」の1つである。「子育て支援団体M」も、「自分か自分の  
子どもが『立川団地小学校』出身」という、領域的な規定を持っていた。しかし、Kmさんの事例の  
ように、「子育て」を共にしたという〈関係の契機〉は、領域的な「アソシエーション」の論理を  
超えていくこともある。それは、SkさんやDzさんと中学校で活動を共にしたという、より大きな

領域での関係であった。また、「子育て支援団体 M」のメンバーたちの活動がより大きな意味を持ったのは、自治会活動が包含できていなかった、個別具体的なケアや支援というボランティアな活動であった。これも、彼女たちの紡いでいる関係は、ある特定の領域的に区切られるものではないことを示している。

(3) 第3に、 이슈ーや組織である。「子育て支援団体 M」の事例で興味深いのは、子どもの非行や虐待といった建替え後の新たな 이슈ーに直面し、ボランティア・アソシエーションとして組織化されることによって、2つの同級生の子を持つ母親たちのつながりが接続し、見守りネットワークの形で可視化されたことである。この点からは、組織化することも、〈関係の契機〉の1つになるということが言える。これは、「駐車場管理部」や「運動会」の担い手たちの例でも同じことが言える。この点は、岩崎信彦が述べた「住縁アソシエーション」や、奥田道大が述べた限定的な 이슈ーを契機とした「有限責任型コミュニティ」の概念とも非常になじむ点である。

(4) 第4に、自治会活動の体験と「記憶」である。KbさんやHsさんの例は、建替え以前からの生活風景を直接知る人たちの関係の中に置かれていたということには注意しなければならない。この場合の近隣に「住まうこと」が〈関係の契機〉になるということは、R.M. マッキーヴァーや岩崎信彦が述べた「共同関心」であるとか、「住まうこと」に伴う 이슈ーというだけでなく、過去の関係の継承・持続でもあるのだ。また、彼らはその後の自治会活動の中での困難を含めた体験と、そこから生み出された「記憶」は、今もなお彼らにある種の「離れ難さ」を与えているのであった。建替え後の「立川団地自治会」の再編と人々の関係の組み直しのプロセスの中で、「住まうこと」は非常に重要な〈関係の契機〉であることは疑いないが、相対的なものである。物理的な領域性に区切られていることや、それに伴い共有される 이슈ーだけでなく、〈関係の持続〉という論点と切り離して考えることはできないのである。

#### 第4章 自治会広報紙における自治会「理念」の構築——過去／現在／未来の参照

本章では、全戸配布の自治会広報誌である「立川団地だより」の分析を通じて、自治会役員たちがいかなる「 이슈ー」から、過去・現在・未来を参照して「理念」を象り、発信していったのかを述べた。まず、計量テキスト分析ソフトである「KH Coder」を用いた頻出語の抽出や語同士の相関関係の図示を行い、「違法駐車・駐車場管理」「動物飼育」「ゴミ・不法投棄」「生活環境」「年中行事」等の個々の具体的な「 이슈ー」を示す語のまとまり同士を媒介する位置に、「自分」「守る」「安心」「安全」「住む」「まち」「必要」「人」等の、「理念」として言及される語が位置づけられることが明らかにした。

次に、「立川団地だより」で言及される4種類の「理念」が、いかなる社会的状況や団地内での出来事（「 이슈ー」）に対して、いかなる過去や目指すべき自治会像を参照しつつ生じていったものだったのか、またそのことで外部社会からいかに発見されていったのかを論じた。第1に、団地に住んだことの「縁（local relationship, fate）」や、人々の「助け合い（mutual aid）」・「互酬性（reciprocity）」の必要性を呼び掛ける語の連関である。第2に、団地や住民の「安心・

安全 (security, keeping/protect one's life) 」を求める語の連関である。第3に、自治会や住民たちの「自律 (autonomy) 」や「自立 (independence) 」を求める語の連関である。第4に、住民たちの「生活 (community life) 」や、それぞれが抱えている問題に「寄り添う (clinical) 」という価値・姿勢を示す語の連関である。

本章の理論的知見として、3点を提示した。

(1) 「立川団地だより」を通じて構築されていった自治会の「理念」には、自治会長である St さんや自治会会計を務める Sk さんたち、建替え以前からの住民が共有する過去の「記憶」が込められていたことを指摘した。例えば、高齢化や孤独死、子どもの非行や虐待といった建替え後の「イシュー」を参照して発せられる「向こう三軒両隣」等の「理念」には、「かつての (建替え以前の) 立川団地での生活風景」、すなわち過去の空間や、そこでの人々の関係が、抽象化される形で述べられ現在化していた。このような過去の「記憶」に基づく「理念」が、建替え後の自治会活動のスローガンともなっていき、人々の中に関係を持続させていくのであった。

(2) 「安心・安全」や「自分たちのまちは自分たちで守ろう」といった「理念」は、「イシュー」に対して「われわれ」の論理を打ち出すが、「移住者の受け入れ」という異質な人々の存在が前景化した時に、ある特定の具体的な「イシュー」ではなく、包括的な自治会の機能や役割を意味するようになっていく。「コミュニティ」という「理念」は、このように異質な他者との出会いの中で伸縮していけるものであれば、内的統合の危険を回避できることが明らかになった。

(3) ある特定の過去・現在・未来を参照しながら論じられてきた「理念」は、自治会活動の中で次第に混在化していった。建替え後まもない時期には過去の「記憶」の現在化であった「理念」が、建替え後の「イシュー」に取り組む自治会活動を通じて、(「記憶」を共有しない人々を含め) 住民たちにとっての現在になっていったのである。このことは、建替え後の「イシュー」に対する自治会活動の積み重ねの中で、新たな「記憶」が人々に生み出されており、過去・現在・未来は「立川団地」を基点とした人々の営みの中で循環していくことも示している。

## 第5章 自治会運営の継承と組み直しの模索——〈関係の持続〉と「新たな契機」の可能性と困難

現在の「立川団地自治会」はいかなる担い手たちによって、いかにして運営されているのか、また既存の担い手たちの関係の中に、新たな担い手たちはいかに参入しうるのかを、2012年以降の自治会運営、また2015年以降の転換期における新たな自治会再編過程を通じて述べてきた。とりわけ、〈関係の持続〉と新たな〈関係の契機〉を共に捉えようとするのが、本章の目的であった。

まず、既存の担い手たちの〈関係の持続〉という観点からは、自治会組織の制度や脱領域的な担い手たちの広がりの中に、建替え後の自治会活動の中で蓄積されてきた担い手たちの関係が持続していることを指摘した。「共同生活上のイシュー」に対して「役員会」という場で組織的解決を担う「三役」たちや、「年中行事」を支える元役員たちの例のように「抜け難さ」を伴う関係に、建替え直後の時期以来の自治会役員たちの困難を伴う経験の蓄積がみられるのであった。

次に、新たな担い手たちにとっての〈関係の契機〉という観点からは、2つの知見を得られた。



①「役員会」での「区長」たちの相互扶助的な議論を通じた新たな「イシュー」の発見が行われ、また「年中行事」では「協力員」「専門部員」といったより多くの担い手たちの有限的な参与の機会が開かれていることが、新たな自治会役員を生み出す契機となっていた。②また、2015年以降自治会活動の担い手たちの減少が生じる中で、新たに自治会役員となった新住民や、「区長」となった東日本大震災の避難者の例もみてきた。ここでは、個別の声掛けが、新たに自治会役員になる〈関係の契機〉になっていた。

そして、〈関係の持続〉と新たな〈関係の契機〉の狭間で生じていたことを捉えるために、「部外者」を含む「年中行事」の再編過程を論じた。2018年、「年中行事」の参加者や運営の担い手たちが減少する中で、「部外者」である筆者が係代表を務めることになった。このことをめぐって、「住まうこと」に伴う自治会という「アソシエーション」の原理（物理的な領域性）と、長年共に担ってきた「年中行事」という場を参照した関係（精神的な領域性）との間でせめぎあいが生じていた。また、翌年の「運動会」後の「競技要綱改訂会議」では、存在そのものが「暗黙知」となっている担い手たちの「閉じた」関係の中に、新たな担い手たちがいかにして参与し継承していきうるか（関係を「開いて」いきうるか）という問題が提起されていた。このような一連のうごきをめぐり、制度的な係代表は団地自治会の物理的な領域性の原理が優先されていく。一方で、自治会主催の新行事開催が模索されるプロセスでは、「協力団体」として「部外者」たちを位置づけ、自治会の物理的な領域性とは抵触しない形で、既存の担い手たち関係（「部外者」を含め「年中行事」という場を参照した精神的な領域性）の保持が試みられた。

## 第6章 結論

本稿の結語として、ある具体的な場所を基点とした〈関係の契機〉と〈関係の持続〉の連環を組み直したり、またそうした連環が複数存在する中で、絶えず線引きし直し続ける営みが、「地域コミュニティ」における担い手たちの「ローカルな実践」であることを論じた。理論的な知見として重要な点は3点であった。

(1) 〈関係の契機〉：本稿から明らかになった「住まうこと」が〈関係の契機〉になるということは、「住まうこと」に伴う「共同関心」であるとか、共通の「イシュー」というだけでなく、過去の関係の継承・持続でもあるのだ。つまり、「住まうこと」が〈関係の契機〉になるかどうかは、誰と、どのように「住まう」のかにかかっているのである。「立川団地自治会」において、新たな担い手たちが活動に参加する〈関係の契機〉が、一方では既存の担い手たちの〈関係の持続〉を意味するのは、上述したような担い手たちの固有の関係の連環の中にあるからである。以上のことからわかるように、建替え後の「立川団地自治会」の再編と人々の関係の組み直しのプロセスの中で、「住まうこと」は非常に重要な〈関係の契機〉であることは疑いないが、相対的なものである。物理的な領域性に区切られていることや、それに伴う自治会「組織」、人々に共有される「イシュー」だけでなく、〈関係の持続〉という論点と切り離して考えることはできないのである。

(2) 〈関係の持続〉：「立川団地だより」を通じて発信される「理念」は、現在の「イシュー」に対して、過去の「立川団地」の生活風景や体験の「記憶」を現在化させるものであった。すなわち、今は失われた過去の空間的な景観やそこでの関係を、「理念」を通じて現在の「イシュー」とも結びつけることで、現在を生きる人々の中に関係を持続させていった。また、建替え後の「イシュー」に対する自治会活動の積み重ねの中で、新たな「記憶」が人々に生み出されていった。言い換えれば、建替え後の自治会活動に参加した人々の間で、新たに共有された「空間」的な枠組みが生じていったのである。現在の自治会役員や元役員たちといった担い手たちが抱く「離れ難さ」を伴う関係は、初めは物理的な領域性に基づいていたものであったが、現在はむしろ精神的な領域性に基づいているということである。そして、特定の「われわれ」を規定する「コミュニティ理念」が、異質な他者との出会いの中で伸縮していくことは、内部の差異の縮減ではなく、新たな担い手を迎え入れつつの〈関係の持続〉の可能性を示していた。

(3) 〈関係を担う主体〉：担い手たちの「ローカルな実践」は、2つの特徴を持つ。①ある特定の場を基点とした他者との関係を持続・継承していこうとする意味での「コミットメントの実践 (practice of commitment)」である。職業生活・家庭生活等自らも複数の文脈で葛藤を抱えつつ、「立川団地」という場を基点に、他者との関係を持続・継承しつつ、新たな担い手たちが参加する契機を生み出そうとし続けている主体であると言える。②1つの場において物理的な領域性に基づく関係と精神的な領域性に基づく関係が衝突する等、既存の〈関係の持続〉と新たな〈関係の契機〉が相反する時に、線引きを変更し、互いに絶えず変成していくような関係をつくり出す実践である。

#### 4. 本論文の評価

1. 本論文は、全体の構成と論旨が明快であり、長期的な「参与的行為調査」の蓄積による問いと知見を、地域社会学・都市社会学の先行研究を踏まえつつ、適切な分析によって位置づけることが出来ており、十分な完成度を有している。
2. 本論文では、従来の「町内会」研究と都市コミュニティ研究に対して適切なレビューが行われている。地域社会学と都市社会学を架橋する試みとして意義を持っている。とりわけ本研究は、組織や組織連合に焦点を当てた「町内会」研究、生態学的な「近隣地区」・「共生」の価値や個人意識・パーソナリティに焦点を当てた都市コミュニティ研究と異なり、これらを「関係の総体」として捉えるための概念として「地域コミュニティ」を規定する、より関係論的な立場に立つものであった。また、〈関係の契機〉、〈関係の持続〉、〈関係を担う主体〉という3つの分析枠組みを設定したことで、パーソナル・ネットワーク（個々の関係）の研究とも異なり、ネットワークが生成・変成するコンテクストに焦点を当てたことに意義があった。本論文は、特定の物理的な領域 (the local) を「基点 (reference points/anchor points)」とした人々の「実践 (practice/practice of commitment)」が、歴史的な過去・現在・未来の循環や、脱領域的な広がりを伴いつつ行われてい

くことを描き出したものであった。

3. 本論文の実証編は、長期にわたるフィールド・リサーチによるデータと知見の蓄積によって、本論文の主題とする「地域コミュニティ」再編と担い手たちの「ローカルな実践」というテーマについての、意義あるモノグラフとなっている。とりわけ、共同研究プロジェクトである「立川プロジェクト」における「複数の目で見えて、複数の声を聴き、複数のやり方で書いていく」ことを体現し、自身も「立川団地」の自治会役員たち（担い手たち）の「実践」の中に組み込まれつつその動態を描き出すという、「フィールドのなかで書くこと (writing in the field, writing while committed)」の試みとなっていた。

4. 他方で、本稿ではフィールド・リサーチの知見に基づき「地域コミュニティ」を関係論的に捉えていたがゆえに、社会構造的な視点、他の事例との比較可能性を担保する位置づけへの言及は、十分に盛り込まれてはいなかった。審査委員からは、以下のような指摘がなされた：

- ・公営住宅のコミュニティを対象としている本論文の理論的な発見を際立たせ、比較可能性や普遍性を確保するためにも、海外の理論や事例研究も含め集合住宅を対象とする先行研究の批判的検討がより必要だったのではないか。

- ・公営住宅のコミュニティの存立基盤とは何なのか。建替えをめぐる生活者の視点・合意形成のあり様など、住宅形態（分譲か賃貸か）等のオフィシャルな枠組みの上に「立川団地」の自治が成り立っているのではないか。また、「立川団地」の自治と外部環境との関係性を描くことで、より文脈を中立的に位置づけることができるのではないか。他の地域との比較、歴史的な比較を可能にするために、社法や貨幣などのコミュニケーションメディア等、外部社会の権力や権威、資源との関係で論じることが重要になる。

- ・「国家による地域社会の支配」への目配りは、よりなされた方がよかった。立川・砂川は基地の町でもあるが、砂川の地付きの人々の団地への眼差しや、地域社会を超える国家レベルの人口変動、少子高齢化や経済変動という「社会構造的視点」をより盛り込むことができたのではないか。

- ・先行研究でも、地域政治の問題を取り上げているような研究は、本論文が言及する価値のある先行研究だったのではないか。

5. また、「参与的行為調査」という枠組みを採用した本研究について、他の社会調査との関係、コア・コミュニティとの関係についてなどを明らかにするという課題について審査委員から指摘された：

- ・「参与的行為調査」の長所については論じられているが、その短所や他の調査方法との比較や連携の可能性について十分論じていないのではないか。また、先行研究同士の論争を通じて、個人・ライフヒストリーの先行研究も取り上げられているが、政治経済的基盤と不可分な動的構造をもつ地域社会を分析するための方法としてどうなのか。

- ・本論文では、〈関係の持続〉、〈関係の契機〉と自治会「理念」について。建替え以前の住民による「記憶」の想起と当為命題化によって「理念」が惹起され、関係の契機と持続が一体となり、

「理念」によって出来事の「予期」や「選択のあり方」を提示することで「関係の新たな契機」が生み出されていることを、具体的かつ動態的に描出することに成功している。一方で、こうした分析視点が章をまたいでの記述に一貫していたのか、年中行事の再編の動態を「物理的な領域性」と「精神的な領域性」という位置づけで描いたのはどうなのか。

・「地域コミュニティ」再編について。この論文では現代における「地域コミュニティ」という価値を確かに示しているが、一方で「ローカルな実践」を支えるコア・コミュニティとはどのように説明できるのか、あるいは地域コミュニティの再編に置いて、複数のコア・コミュニティがいかんして接合的コミュニティを生成・変成させているのか。新しい年中行事の再編ではなく、住民の高齢化に伴うニーズの変化を反映し、介護や介助等の日常的な交流へとシフトしていく可能性はないのか。役員たちはどのように認識しているのか、調査者の立場ゆえに見えていなかったことなのか。

・「理念」の分析について。「理念」をうごきの中で捉えていく参与的行為調査をしながら、テキスト分析から抽出するのに留めてしまったのはどうしてか。前自治会長のStさんにライフヒストリー・インタビューをすることはできなかったのか。テキスト化される前の思い、理念や価値の生成、変成を知る上で重要ではないか。また、インフォーマントの選定のプロセスや、参与的行為調査によって得られたデータを選ぶ基準についての説明が必要だったのではないか。

・本論文では「ローカルな実践」に焦点を当てているが、そこでの「先行世代の記憶の継承」というストーリーにどうしても窮屈さを感じてしまう。「理念」や「記憶」の継承は、何らかの「イデオロギー」「言説戦略」でもあったのではないか。また、残された課題に書かれているが、「正常人口の正常生活」に隠れてしまう生活・生や抑圧されてしまう生活・生もまた「ローカルな実践」であり得るのではないか。

6. 以上の指摘を踏まえると、本研究の今後の課題は、「参与的行為調査」で得られた知見を、より都市東京と郊外の立川・砂川、そして都営団地の構造的・制度的な力学や、他の地域との歴史的な比較も含めてより大きな社会構造的視点に位置づけていくこととなる。このことは、本論文で「今後の課題」として言及されていた「取りこぼされた対象」（地域活動に関心を持たない層、一切参与しない層）をより自覚することにもつながり、豊かなモノグラフとしての記述から、より普遍的な理論的知見を析出していくことにも結び付いていくだろう。

7. 以上のような課題を残すものの、本論文の「地域コミュニティ」のモノグラフと、結論で示された「地域コミュニティ」再編の関係論的な知見の意義は、十分なものであると言える。都市郊外のなかの旧農村地域に突然、ひとつの「街」として形成された公営団地をフィールドとする調査研究は、ひとつの国民社会の開発・発展、都市・農村問題を再審する可能性を有している。地域社会学の講造分析がとらえようとした総合開発計画の問題、都市コミュニティ論が捉えようとした「近隣」の共同性の構築へのひとつの応答であるという学問的な意義がある。また、中央大学文学部の地域社会学（島崎稔）と都市コミュニティ研究（奥田道大）という二つの学問の系譜を架橋するという意味もあった。「立川団地」の人々の「ローカルな実践」の普遍的な意味を、より大きな社会構造

的な視点を持ち、他の事例や歴史的な比較研究の可能性も含めて描き出せるようになっていってほしいという期待を込め、審査員一同、博士（社会学）の学位を授与するにふさわしいと認定した。